在外研修成果報告

—ドイツと北欧をめぐる—

1975年9月11日から11月10日まで，文部省在外研修生として，ヨーロッパ7カ国をめぐった。ドイツ連邦共和国で1カ月過したほかは数日間づつの短期滞在である。

ドイツ連邦共和国では，ハイデルベルク大学（ミロイチチ教授），ハンブルク大学（フライ教授），ケルン大学（リューニク教授），フランクフルト考古学研究所 ローマ=ゲルマン委員会（シューベルト博士）で，学史，型式学，土器・石斧・石鏃，埋納遺物などについて学び，文献渉猟にはげんだ。また各地の博物館では，展示方法を学ぶ点も多かった。ケルンで開催中の，「古い世界の新しい姿」展は，1950年来の重要発見遺物を網羅すると同時に，現代ドイツ考古学の研究方法を解説し，埋蔵文化財壊滅の危機をうったえることにも意を尽しており，その姿勢に感銘をうけた。フライ教授のすすめで，ビュルツブルクの考古学協会大会におもむくと，出席者名簿に名があがっており，懇親会での委員長挨拶の中でも紹介をうけるなど，予期せぬこともあり，ヘルベルト=キューン博士ほか多数の考古学者と知りあうことができた。

ドイツ民主共和国では，ベルリンの D.D.R. 科学アカデミー（キッタ博士），ハツレ博物館（マティアス氏），マルチン=ルター大学（シュレッテ教授）で勉強した。中石器時代土器として日本でも知られている灯心草土器（ビンゼン=ケラーミク）が新石器時代後半にぞくすること，青銅器時代のロクロ土器なるものが，じつは粘土帯積み上げ法によっていることを確め，14C年代ほか多くの問題について知識・意見を交換した。

オーストリアでは，ウィーン大学（ピチオニ教授），自然史博物館（メリヒャー博士）をたずね，ハルシュタット遺跡の岩塩坑の壁をなめ，ザルツブルクのモーツアルト生家を訪れて，しばし感慨にふけった。

デンマークでは，1970年に来所した B. クリステンセン博士のお世話になり，国立博物館では，展示方法を記録したほか，トムセンの『北欧古代学入門』をめぐる疑問を解決し，彼の墓に詣でた。またライレの実験考古学農場を訪問した。スェーデンでは，遠東博物館（ヴィルギン博士）の展示方法を記録し，モンテリウスの初期の文献を受贈し，墓参した。オランダでは，グローニンゲンの生物考古学研究所（ウオーターボルク教授）を訪問した。イギリスでは，新石器時代を定義した原典，ラボックの『先史時代』の初版をみることができた。また学史にくわしいダニエル教授（ケンブリッジ大学）にトムセン英訳に訳者の付加が多いことを報告した。

今回の渡欧は，ハンブルクで高価なコーラを飲まされるなど苦い経験もあったが，ヨーロッパの風土・人間に直接せっすることができた喜びは，学問的収穫にも増して大きい。

なお，西ベルリンのドイツ考古学研究所，ハイデルベルク大学，ケルン大学，マインツのローマ=ゲルマン中央博物館，東ベルリンの D.D.R. 科学アカデミー，マルチン=ルター大学，コペンハーゲン大学，ケンブリッジ大学では，持参したスライドによって日本先史時代概説，飛鳥～平城宮概説を行い，欧文による紹介の必要性をうながされることもしばしばであった。

（佐原　眞）